

歯科衛生士学科研究会講演抄録

当研究会も3年目に入り、1999年度計16回の研究会を持つことができた。本年からは、200字の抄録の掲載が許可されたが、紀要委員会に対しては感謝の意を表したい。当研究会も、歯科衛生士学科構成メンバーには次第に浸透するようになり、附属歯科診療所の歯科医師からの発表も加わり、大学らしい研究体制へ近づきつつあるように思う。次年度からは、明倫短期大学研究会として、両学科共通の研究、討論の場として進められるようにと望んでいる。

(技)は歯科技工士学科の略(文責 世話人 福島祥紘)

第19回：1999年1月14日(木)

障害児の歯科治療

小野 博志 教授

障害児の殆どは先天的な原因による発達障害を伴うことによって、日常生活を送ることが相当に困難な状態にある小児である。口腔領域の疾患の予防や治療においても、障害の病態や程度によって対応法に様々な考慮を払う必要がある。歯科臨床において遭遇する頻度が比較的高い障害児を取り上げ、それらの特徴と歯科治療に際しての主な留意点を要約して述べた。

第20回：3月11日(木) セミナー

外国語の語彙学習における記憶法

広瀬 浩二 講師

James Coady & Thomas Huckin(Eds.) 1997. Second Language Vocabulary Acquisition. CPUの中から、Chapter10. Mnemonic methods in foreign language vocabulary learning. (Jan H. Hulstijn)の論文を取り上げた。著者にとって英語は外国語であり、多くの新出語にいかに対処したらいいのか、著者自身が自問自答している。形式と意味の結び付きに注目し、覚えにくい単語にはkeyword methodなどの記憶術の使用を提案している。

インフルエンザ大流行を予防する新薬の開発

福島 祥紘 教授

T. Lasky et.al. : Guillan-Barre Syndrome & Influenza Vaccines. New Eng. J. Med. 339 : 1797~1802, 1998

W. G. Laver et.al. : Disarming Flu Viruses. Scientific

American, Jan. 1999

1998年11月に日本でも抗インフルエンザ薬としてアマンダジンが認可された。しかし、この薬はA型ウイルスにのみ効果があり、B型には効かず、かつ、耐性が出現しやすい。さらに、ワクチンについても最近ギラン・バレー症候群の増加が云々されており、新しいインフルエンザ大流行が心配されている。そこへ、インフルエンザ・ウィルススパイクであるノイラミニターゼの立体構造が解明されるに及び、ウィルスと感染細胞との接着のメカニズムを妨げる新薬が開発されて、臨床段階に来ている。

第21回：3月25日(木) セミナー

歯科衛生士のための心理学〈1〉

山田 隆文 講師

歯科医療も医師中心のおまかせ医療から、徐々に患者中心の医療へと変化してきている。医師側がただ説明するだけの一方通行のムンテラと違い、インフォームドコンセントでは患者さんがどのような希望を持っているのかや相手の理解度を敏感に察知し、言葉ばかりでなく心理的なキャッチボールをする事が重要となってくる。またその時に、どのような気持ちで患者に接するべきかを考え、患者の心理を知る上での基本について話しをした。

障害高齢者疑似体験で得た介護の実際

八木 恵美 助手

四体麻痺を有し、排泄、感覚機能に障害を持つ要介護者と、介護する側の立場で疑似体験を行った結果、両者の肉体的苦痛はもとより精神的苦痛は想像以上に大きかった。この体験を通し要介護者のニーズに合った介護は、その人の自立とQOLの向上に大きく役立つことを再認識した。今後、要介護者に接する際には、介護される立場に立った見守り・援助が大切であると感じた。また本疑似体験の結果を生かし、本学の設備・器具を有効に活用して学生の福祉施設における臨地実習事前指導に役立てていきたい。